不登校傾向にある生徒の対人困難とその克服要因
佐藤逸子
（女子聖学院高等学校）

不登校生徒への対応は今日の学校に於ける最重要課題であるにも拘らず、要因が個々に異なるために適切な対策を講じることが困難である。本研究では、昨年から今年度にかけて対人関係から不登校傾向にあった2生徒の発達課題とその克服要因を分析することによって、学校不適応感を持つ生徒への教師の対応のあり方を模索する。

【研究1】 集団の特性調査（質問紙法）
被験者：2人の生徒（A子B子）の所属する学年生徒をI群（内部適応よりはむしろ外的適応者26人）II群（内部適応をし、対人関係が安定している者21人）III群（対人関係で不適応感を持つ者14人）IV群（どちらでもない者15人）の76人を抽出した。（仮想教師の判断による）
質問項目：対人欲求尺度（渡部,1999）（賞賛欲求・非拒否欲求・回避欲求からなる）他者行動の感受性尺度（Lennox&Wolf,1984）及び理想自己（ISE）現実自己（RSE）とから構成される自尊感情尺度（菅,1975）
時期：2001年11月
結果：①各尺度得点の群平均比較結果
分散分析の結果、ISEのみグループ間に有意差があり、多重比較の結果、III群がI・II群より有意に高かった（p＜0.01）。また差検定の結果、賞賛欲求はIII群がII群より有意に強かった（p＜.01）。
②各尺度間の相関関係
I・II群に賞賛欲求と非拒否の有無に正の相関関係がみられた（p＜0.01）。III群及びIV群で拒否と回避の間に有意な正の相関観察が認められた（p＜0.01）。III群のみRSEとISEに有意な正の相関関係がみられた（p＜0.01）。
考察：不適応群にみられる特徴は賞賛欲求が強く、現実自己認識が強いほど理想自己欲求も強い。また他者から拒否されることを拒む気持ちが強いほど、回避傾向が強いことが示唆された。これは渡部の大学生対象の結果である「自尊感情が低く社会スキルの乏しい者に回避傾向が、その中間に非拒否傾向が見いだされる」ことから、高校時代には不適応感を抱く生徒は自己をまだ受容するまでには至らず、現実自己と理想自己とのギャップに悩み、対人関係にも非拒否感が回避行動をもたらすのではないかと考えられる。

【研究2】A子B子の発達課題
2人とも小学校時代にいじめに遭い、A子は担任の対応に失望し、B子の場合は助けた担任が次のいじめのターゲットになり、自尊の思いが失調症を引き起こした。この経験は中学時代にも引き続き、2人とも部活に入部し、友人を求めたが、対人関係でトラブルとなる。A子は中学時代も単独行動が多く、場に不適当な発言が目立った。しかしそのような「悲劇のヒロイ」という自己認識を改善しようと努力を始めたきっかけは、英会話教室で出会った先生の励ましによるところが大きい。一方B子は学年外の教師が相談相手になり自己受容体験の結果、自己他者間の変容が起こっている。
2人の対人特徴は賞賛欲求が強く理想自己も高い。非拒否及び回避傾向も強い。異なる点はA子のみ他者行動への感受性が低く、現実自己認知も低い。A子は「自分は変わり者である」と認識をもち現実自己像も高くないため、他の視線や考えを無視することで自己防衛をし、内在的適応を目指していると考えられる。B子は他者の考えや行動には敏感であり、現在報道委員長として外的適応を目指していると考えられる。

【克服要因についての考察】
2人に共通していることは第3者の受容と介入が適切な時期にあったこと。理想自己像を高くもち、あきらめなかったことである。社会的スキルは乏しいと考えられるが、ほぼ正確なセルフモニタリングがなされたのは、周囲の家族・友人等の存在も大きい。Ⅲ群の賞賛欲求の強さからも、賞賛されることが克服に欠かせないと考えられる。学級担任は対人関係で難航している生徒に対して、肥大した理想自己に圧倒されることなくまず彼女らを受容し、暖かい励ましと語りかけて同時に、心を聞く適切な場を設ける努力を続けるべきであり、家庭との協力で必ず克服できるという希望を持続する必要がある。